ほうそうげ

生駒市立俵口小学校　学校だより

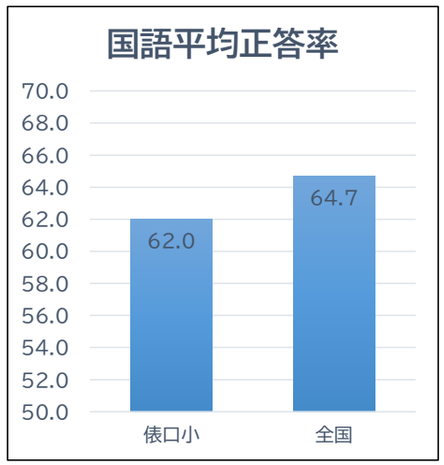
令和3年度　特別号

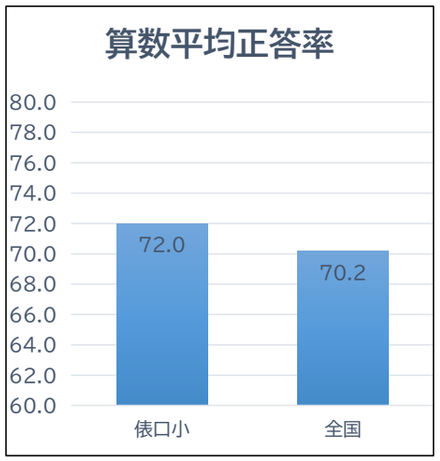
今学期も、残すところあとわずかになりました。日常の学習活動に加えて、全校での学校行事、学年での取組、地域や関係機関のたくさんの方々に来校いただいた出前授業や、スクールボランティアに協力いただいた学習活動。仲間とさまざまな体験をした子どもたちは、心も身体も大きく成長してきました。振り返りをしっかりして、次の目標をもって歩みを進めてほしいと思っています。

全国学力・学習状況調査の結果から

本年度も5月に「全国学力・学習状況調査」（調査対象：小学6年生）が実施されました。
調査科目は「国語」「算数」で，それぞれ次の（ア）と（イ）が一体的に出題されました。
（ア）身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や，実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など
（イ）知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や，様々な問題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容

本校の結果をもとに，個々の設問について，正答率が比較的高かった設問と低かった設問を明らかにし，本校児童の学力の傾向の分析をとおして，今後の教育活動に活かしていきたいと思います。ここでは，俵口小学校の調査結果の概要を報告します。





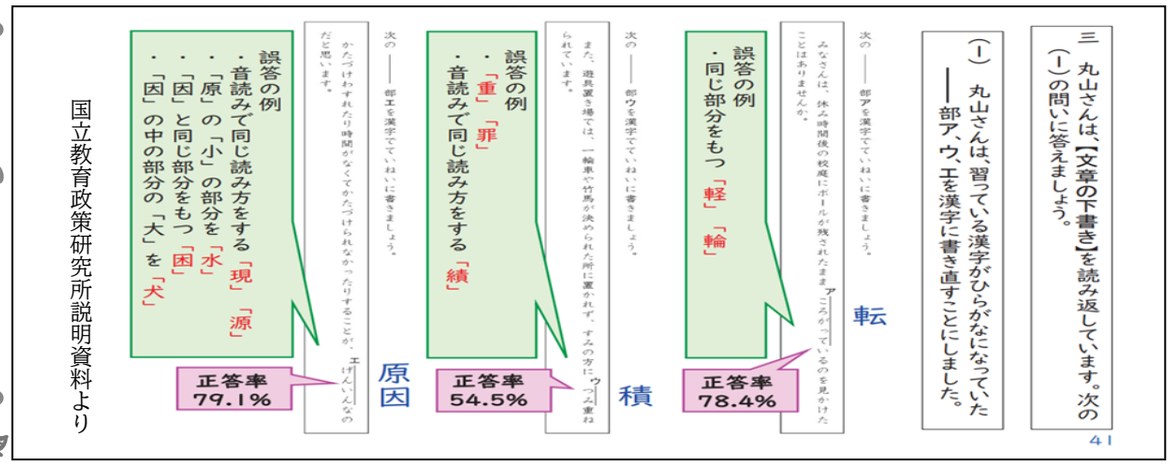
＊文部科学省は結果公表について「本調査により測定できるのは学力の特定の一部分であること、学校における教育活動の一側面に過ぎないことなどを踏まえるとともに、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮すること」と定めています。
ここでは学校の序列化を可能にする具体的数値を含めないで、児童の傾向を示しています。

国語

奈良県平均を上回る正答率でしたが、全国平均にはとどかない結果でした。全国に比べて、本校は無回答率が高く、特に設問の後半でその率が高くなっています。これらの問題が、短答式、選択式の解答形式であるにも関わらず無解答率が高いことを考えると、前半の解答に時間がかかり、後半、問題を解く時間が足りなくなったと考えられます。実際に、質問紙調査（68）の「解答時間は十分であるか」という問いに対して、肯定的な回答をした児童は39．7パーセントしかなく、全国のそれと比較すると30．6ポイントも下回っています。解答する際には、設問中のキーワードからその意図を速く正確に読み取って解答していくことが、大切です。文章を読む際には、目的に応じて、たくさんの情報から必要な情報を見つけさせるという学習活動を、普段の学習活動から継続して行っていきたいと思います。

話の内容が明確になるようにスピーチの構成を考えたり、資料を活用して自分の考えが伝わるように話したりすることができるかをみる問題において、「資料を用いた目的を理解する」問題や、「文章全体の構成を捉え、内容の中心となる事柄を把握する」問題では、高い正答率（全国比）でした。自分の考えが伝わるよう資料を活用したり、文章全体の構成を捉えて用紙を把握したりといったことは、定着できているということが分かります。

しかし、筋道の通った文章となるように文章全体の構成や展開を考えたり、目的や意図に応じて書き表し方を工夫したりしながら、自分の考えを主張する文章を書くことができるかをみる問題においては、「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う」問題や「文の中における修飾と被修飾との関係を捉える」問題で、正答率が全国を大きく下回りました。「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う」問題は、自分が書いた文章を読み直し習った漢字に書き直すという出題形式で「ころがっている」「つみ重ねられている」「げんいん」の「転がって」「積み重ね」「原因」を解答する問題でした。「転がって」は全国を16ポイント、「積み重ね」は全国を14ポイント、「原因」は全国を6ポイント下回っていました。日常的に文や文章の中で漢字を適切に使うようにすることは、漢字を習得するうえでとても大切なことです。国語科の学習に限らず、日常のあらゆる場面で学習した漢字を正しく使うこと、意識して使うことを習慣づけるようにする必要があります。学習した漢字を繰り返し書いて練習することのみならず、漢字のもつ意味を考えながら、実際に文や文章の中で使う場面を設定したり、日常的に適切に漢字が用いられているかを確認したりすることが、大切だと考えます。



国立教育政策研究所説明資料より

ほうそうげ

生駒市立俵口小学校　学校だより
令和３年度　特別号

算数

奈良県平均、全国平均共に上回る正答率で、全体的によくできていました。「変化と関係」の領域が若干、全国を下回りましたが、それ以外の「数と計算」「図形」「測定」「データの活用」の領域は、全国を上回りました。中でも「数と計算」と「測定」領域については、どの設問においても全国平均を上回る正答率でした。

正答率が9割を超えており、なおかつ全国平均を上回っていたものは、「測定」領域の「条件に合う時刻を求めることができるか」を見る問題と、「データの活用」領域の「棒グラフから数量を読み取ることができるか」を見る問題、「棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができるか」を見る問題でした。また、そこまでではないものの、正答率が85％を超えており、なおかつ全国平均を上回っていたものは、「変化と関係」領域の「速さが一定であることを基に道のりと時間の関係について考察することができるか」を見る問題と、「速さと道のりを基に、時間を求める式に表すことができるか」を見る問題、「数と計算」領域の「示された除法の結果について、日常生活の場面に即して判断することができるか」を見る問題の3つでした。

一方、「変化と関係」領域の「速さを求める除法の式と商の意味を理解しているか」を見る問題は全国平均を大きく下回りました。このことから、本校の児童は、道のりと速さの関係の理解が不十分であるということが分かりました。示された式が1分当たりに進む道のりを求めるための式であることは理解しているものの、求めた商を比べた時に、数値が小さいほうが速いと捉えている児童が多いと考えられます。答えが得られた後に、日常の事象に戻して答えの意味を考えるよう指導していきます。また、「図形」領域の「三角形の面積の求め方について理解しているか」を見る問題も、全国平均を下回り、三角形の面積の求め方についての理解が不十分であるということも分かりました。そもそも、面積を求める公式が覚えられていない児童もいますが、底辺と高さの関係性の理解が不十分なため、直角に着目することができずに問題を解くことができていない児童が多くいると考えられます。三角形や平行四辺形の底辺と高さの関係の理解を確実にし、図形を構成する要素に着目して、求積のためにはどの部分の長さを図る必要があるのかということを常に考えさせるよう、指導していきたいと思います。そして、「データの活用」領域の「帯グラフで表された複数のデータを比較し、示された特徴をもった項目とその割合を記述できるか」を見る問題も、若干、全国平均を下回りました。この問題は複数のデータを比較し、示された特徴を持った項目とその値記述する問題ですが、問いが2つあるのに1つしか答えていなかったり、割合のちがいが一番大きいという設問を割合が一番大きいと読み間違えていたり、といった問題文の読み間違いが見られました。問題を解くために必要な情報を正しく読み取る、といった力が身につくよう指導していかなければならないと考えます。

今後、算数科の指導においては、日常生活の事象を数理的に捉える機会を積極的に設定し、算数の有用感を実感しながら学べる工夫を充実させ、算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える児童の育成を図っていきたいと思います。

児童質問紙調査より

学力調査と同時に実施された児童質問紙調査は、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等について調査するものです。

今回の質問紙調査では、「人の役に立つ人間になりたいと思う」「友達と協力するのは楽しいと思う」「今住んでいる地域の行事に参加している」といった項目で、肯定的意見の割合が全国平均を上回りました。「人の役に立つ人間になりたいと思う」「友達と協力するのは楽しいと思う」の項目については、95％以上の児童が肯定的に回答しており、仲間と協力してやり遂げることのよさを理解し、人のためになることをしようとする、たわらぐちっ子のよさが表れた結果になりました。「今住んでいる地域の行事に参加している」については、全国を12．5ポイント、生駒市平均では14．5ポイント上回りました。しかし、「地域や社会をよくするために、何をすべきかを考えることがある」については、全国よりも17．1ポイント下回りました。今年度からは地域学校協働活動も始まりました。こういった活動や取組を通じて、地域を大切に、そして誇りに思う意識が児童にしっかりと根付き、児童が地域の担い手として主体的に考え、行動していくことを願ってやみません。

「5年生までに受けた授業で、コンピュータなどのICT機器を週1回以上使用した」「学校で、コンピュータなどのICT機器を他の友達と意見を交換したり、調べたりするために、週1回以上使用した」といったICTを活用した学習状況についての質問項目では、全国と比べて30ポイント近く上回りました。「5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるように、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた」の項目についても全国より上回っていることから、タブレットを活用して他者と意見の共有を図るなどの教育活動を、本校が積極的に展開してきた成果が表れていると思われます。しかし、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」という項目では、生駒市の結果を上回ったものの、全国よりも下回りました。昨年度より本校では特別の教科道徳において、書く活動を中心に児童の思考力や判断力を培ってきました。道徳に限らず、コロナ禍においてはなかなか話合い活動を行うことができませんでしたが、今後はコロナの感染状況をみながら、ICT 機器の活用と話合い活動を組み合わせた教育活動を実践していきます。

「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」や、「学級活動における学級での話合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる」の項目は、ともに全国の結果を上回っており、児童らが充実した学級活動を展開できていることが分かりました。それに対して、「自分と違う意見について考えるのは、楽しいと思います」という項目では、全国を大きく下回りました。他者との協働活動において、こういった考え方や姿勢はとても大切なものです。主体的・対話的で深い学びを構築する学習活動を展開し、改善を図っていきます。「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしている」「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している」の項目も全国を下回りました。目標達成に向けてのプロセスを児童自身に考えさせたり、スモールステップで目標を達成させたりするなど、児童に成功体験を味わわせる活動を設定していきたいと思います。

最後に学習環境や学習習慣等ですが、「普段、1日当たり2時間以上テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をする」は、全国、生駒市共に上回りました。反対に「学校の授業時間以外に月曜日から金曜日には、1日当たり2時間以上、勉強をする（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」は全国、生駒市共に下回りました。また、「学校の授業時間以外に、月曜日から金曜日で1日当たり読書をするのは、10分未満である（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」も全国、生駒市を大きく上回り、半数の児童が全く読まないか、読んでも10分未満という結果が出ました。このことから、本校の児童は、家庭学習や読書時間は短く、テレビゲームに費やす時間が長いといったことが明らかになりました。学力向上に、望ましい学習環境や学習習慣が必要不可欠であることは、言うまでもないことです。学校と家庭が連携することで、児童のより良い成長を目指していきたいと思います。